

St. Luke's International University Repository

MEMENTO MORI: 寄り添うということ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 卓志, Takahashi, Takushi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00015049

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



— 特別講演 —

MEMENTO MORI

— 寄り添うということ —

高橋卓志¹⁾

I. はじめに

看護師並びに看護師になりたいという、なろうとしている人たちにはぜひ聞いてもらいたい話があります。そのテーマは「死」です。「死」というものはお坊さんの専門だと皆さん思っただけかもしれませんが、今のお坊さんたちの専門は「死後」です。

仏教の現状はそのようですが、私は死の現場を今までずっと歩き続けてきました。そのなかから今日のお話の内容を皆さんに提示させていただきたいと思います。

II. ゴーギャンの絵—生老病死—

まず本日のテーマ「メメント・モリ (Memento mori)」。皆さんよくご存知だと思いますけれども、このメメント・モリという言葉はラテン語で「死を想え」という言葉なんです。

一枚の絵を見ていただきます。英語のタイトルを日本語に訳すと「私たちはどこから来たのか？ 私たちは一体何者か？ 私たちは一体どこへいこうとしているのか？」、この絵のなかにこういう大きな3つのテーマがあります。この3つのテーマが1つの絵に集約されたのが、ポール・ゴーギャンの絵です。彼は1897年にこの作品を完成させています。これは人間の存在の意味というものを問いかけた作品として非常に有名です。聖路加の日野原先生がレオ・バスカーリアの「葉っぱのフレディ」を題材にとって、その劇をつくられているんですけど、劇の一番最初に出てくるスライドがこの絵です。ゴーギャンは1904年に死ぬんですけども、これが最後の作品なんです。そしてこれは見ていただくとわかるんですが、右側から左側に向かって時系列で動いていくのです。右端に生まれたばかりの赤ちゃんが寝ています。真ん中にはリンゴをとるアダムがいます。そして左のほうには頬杖をつく老婆が描かれています。つまりこちらの右から、「生老病死」という人生のプロセスが描かれているというふうに考えてください。

そしてこれは人間の誕生、それから象徴的に描かれて

いるのは、このアダムがリンゴをとるという人間の原罪、もともとの罪。それから容赦なく襲ってくる死というものがこのなかに描かれ、そして当時の彼の思索の帰着点ともいえる精神世界がこの絵のなかに描かれています。そしてそれは死と真向から対峙して生み出された絵であるというふうに評価されています。この絵の前後に彼は自殺未遂をし、それが元で亡くなっていくわけですね。今日はこの「生老病死」という流れについて話しますが、「しょう」というのは「生きる」という字です。あるいは「せいろびょうし」と読む方がいいんですけどもこれは「しょうろびょうし」と読みます。「生老病死」にはすべて苦しみの「苦」というのがついてきます。生苦、老苦、病苦、死苦といって、この4つの苦しみのことを仏教用語ですけれども四苦といいますが、4つの苦しみ、それでそれにもう四つ別の苦がくっついて八苦になって四苦八苦といわれているんですね。

それからもうひとつはこの人生のプロセスのなかで最終的に帰着する場所が死であるということ、これはもうどうにもならない定めであるわけなんですけれども、そのところを今日は少し考えてみたい、そして私自身も死というものに向かって今生きているんだということから皆様に迫っていきたいというふうに思っております。

III. 死

死という字がど真ん中に出てくると大体が「縁起が悪い」と言い始めるんですね。この死という字とお坊さんの黒い衣がオーバーラップするわけです。だから坊さんがいると縁起が悪いという話になっちゃうんですね。決してそういうことないですよ。だけどこの死というものをこの文字自体が「うわ、嫌だ」と思っちゃう、そういう人が非常に多いのですが、この死について考えてみたいと思います。

私はインドのベナレスに1年近くいたんですが、ベナレスの東にはガンジスが流れています。そのガンジスに下りていくガートという階段があって、そのひとつにマニカルニカというガートがあるんです。そのマニカルニ

1) 松本市神宮寺住職

かって呼ばれているガートはいわゆる火葬場なんです。火葬場で薪が積み上げられ、その上に遺体が乗せられて焼かれている。今ベナレスはガスとか重油で遺体を焼くこともあるけれども、ずっと昔からこうでした。そのマニカルニカのカートから何本もの煙が立ち上り、遺体が焼かれてそれがガンジスに最後に灰として流されるんです。死の風景です。

この風景を私はもう学生時代からずっと見続けておりました。そんななかから今日はその死のことを考えていきたいと思うのですが、簡単に定義をします。「死というのは個人が1人で対面しなければならない困難な問題である」。あなたの問題ですよということなんです。

死というものは私たちは二人称、三人称として私の患者さん、私の父親、私の母親というような形でもって今まで対面してきてるんですけれども、実をいうと死というのは自分自身の問題であるということを厳然と自分自身で考えていかなければならない、そうなったときものすごく困難な問題が出てくるんだということでもあります。

そしてこれは生物学的にいうと「死とは必ず実行されるものである」。おぎゃーと生まれる前の段階、つまり皆さんの体がひとつの生命体として心臓の鼓動を一步、第一回目の動きをしたときからもうすでにこれは死するべき運命に入り込んでるという、そういったマトリックスのなかに入り込んでるんだと考えなければいけないということですね。つまり私の遺伝子は子どもに引き継がれる場合がありますけれども、私自身のその生殖情報はここで切り取られるということです、終わるということです。そして「死ぬ運命を負わされた体細胞によって構成される個体が消える瞬間である」。死ぬ運命を私たちはもうすでに生まれたての細胞のなかにもっているということです。これが消える瞬間が死の瞬間であるという、これは生物学的に考えられたものでありますけど、そういう定義をしておきます。

IV. 死と終わり

では死によってすべては終わってしまうのだろうか？ 死はすべての関連性を断つものであろうか？ 死というものは苦しみ、苦を呼ぶというふうに先ほど申しました。四苦の根本的な原因、死の苦しみの根本的な問題というのは私はこれで終わる、すべては終わってしまう、すべての関連が断たれる、自分の妻との関係、自分の子どもとの関係、自分と社会との関係、自分と自然との関係、これがすべて断たれてしまうんだという恐怖心のなかにあるというのは非常に多いですね。

それともうひとついうと、これはほとんどの方は気づいてないんですけど、実をいうと死というものの恐怖は嫉妬心にあるといわれています。私がここで死んでも世の中はそのまま動いていく。私はそのなかに参加でき

ない、これ一種のジェラシーです。例えば自分の子どもがいる、自分の孫がいる。自分の孫たちは私が死んだところでどうせ3日も経ちゃ私のことなんか忘れてしまうし。終わりよそんな悲しみはという。すごいジェラシーのなかに苦しみは生まれるんですね。私が死んだところで子どもたちは、孫たちは運動会を楽しげにやる、それであと10年後には結婚する、でも私はそこに参加できない、そこら辺の苦しみが非常に大きいということですね。

皆さんのなかで死によってすべてが終わってしまう、死はすべてのおしまいよと思う方。それからいや違う、死の向こう側に、死の先に何かがありそうだっていう、これはもうご経験された方は1人もいらっしやらないと思いますので、このなかで、でも臨死体験というのが現在ありますからね、臨死状態になられた方もなかにはいらっしやるかもしれないですが、この先に何かありそうだと思う方、ちょっとすみません、手を挙げていただけますか？ はい、大体全国平均です。

だからこれがほんとにあるかどうかというのは皆さん1回きりしか経験できないからそれを楽しみにしていただきたいんですが、この先ですよ。だけどその有る無しという意識の問題によって大きく自分の生き方が変わってくるのです。

V. 死——一人称の死——

この本ご存じですか？ エリザベス・キューブラー・ロスというアメリカの精神科医ですね。非常に有名な精神科医です。この精神科医であるキューブラー・ロスのこの『死ぬ瞬間』によってターミナルケアの現場に入っていたという看護師さんたちがものすごくたくさんいます、医療者もそうです。私の友人で『病院で死ぬということ』というのを書いた山崎章朗さんというドクターがいるんですが、山崎さんもこの本によって外科のドクターからホスピスドクターに転身したという、そういう有名な本なんですけど。

これ気をつけていただきたいものがあって、実をいうと、キューブラー・ロスは四十数年にわたって数千人の人々の最後を看取ってきたんですね。そして死にゆく人々に対して励ましたり愛の言葉をかけて、その功績によって聖人、あるいは聖女っていうふうには呼ばれていました。

ところが晩年脳梗塞に倒れました。脳梗塞に倒れた途端うつ状態がきて、結局キューブラー・ロスは何を言ったかという、「もうこんな生活はたくさんよ。愛なんてもううんざり。よく言ったものだよ」と言ったということです。これ本当の話らしいです。

そしてそのなかで彼女、非常に最後厳しい言葉を使うんですけど、自分の仕事とか名声に対してたくさんファンレターが届くわけですね。私も実をいうとこの『死

ぬ瞬間』という本によって触発されています。そしてこの『死ぬ瞬間』のなかには皆さんよくご存知の死に向かう5つのプロセスというのがありますね。その5つのプロセスというのが非常に有名になったんですが、実をいうとこの死ぬ瞬間の前段階で5つのプロセスよりももっと私の心をうったところがあるんです。ここは『病院で死ぬということ』を書いた山崎章朗さんも同じことを感じておられるんです。実をいうと彼女が幼少を過ごしたスイスでお隣の方が木から落ちて重傷を負ったというんですね。そして病院に運ばなければ死ぬというときに彼はそれをとどめて「家で死なしてくれ」と言いました。そして彼は「病院で打たれる延命用の注射よりは、この家で作ってもらえる温かいスープのひとさじのほうが私にとってはすごい緩和剤になる」って言っているわけですよ。

キューブラー・ロスの『死ぬ瞬間』はまずここを押さえないきゃいけないです。そしてそこから彼女は何千人にもインタビューをして、その死に向かう現実を言葉に表してきたわけですね。

ところがそのようにした彼女がなんと最後の最後に、「そんなのは何の意味もない。また何もできずにいる自分など一銭の値打ちもない、価値もない」と言ったというんです。

これは、いわゆる今日私がテーマにしようと思っている「一人称、二人称、三人称の死というもの」につながっていくものであります。キューブラー・ロスに対してすごく思いを強くもってらっしゃる方が、このなかにもたくさんいらっしゃいます。そして、この言葉というのは「何もできずにいる自分など一銭の価値もない」というふうに脳梗塞をわずらった後に発した言葉であり、精神状態が異常であったかもしれない、正常ではなかったのかもしれない、だけどそれは人間の本性です。人間がやってきたことはすべて奇麗ごとでよいことだけではないんです。しかもそのことをキューブラー・ロス

は自分自身が身をもって知っていました。そしてそれがほんとの愛だっていうふうに思うんですね。その自分のことをあからさまに申し上げていくこと。

ほんとうはそうでなかったかもしれない、だけど自分は今何もできない、その何もできないつらさというのが彼女の言葉をこうさせているというように感じます。そのキューブラー・ロスの話ではないんですが、私も皆さんにこういう話を申し上げているんですけども、実はその知識とか教養とかをどんどん積み上げていったところで、例えば自分の死というものが眼前に迫ってきたときその回答を私自身が出すことができるだろうか？ そして今までやってきたこととの整合性のあった形で私自身は生き方を人前にさらしていけるだろうか？ そういうことを常に考えています。

だから二人称、三人称のベッドサイドにいて、エンドステージにいる患者さんたちを私自身が見ていくという状態から、今度私自身がベッドに寝たとき、これをどういうふうにするかというところが非常に大きな問題になるし難しいところだと思っています。今日はその点をちょっと解明していきたいというふうに思っています。

この後、先生はメモト・モリの原点の解釈、版画「死の舞踏」や「ボヘミアの農夫」の裁判、新井満の『千の風になって』の解釈などを話されました。またご自身の一人称の死を知ることで自分自身の生の本質を知りたいとの考えが先生を旅に駆り立てます（ピアク島、チェルノブイリやタイへの旅）。さらに戦場写真家の岡村昭彦やマザー・メアリー・エイケンヘッドの影響を受け、タイのエイズの人々やホスピスの現場へと足を向けます。

お寺のある浅間温泉での通所サービス、デイサービス、それから訪問介護、ショートステイなどの活動、先生の活動は急ピッチに進んでいます。